



vol. 92

[編集・発行]
〒 260-0013 千葉市中央区中央 3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art 3-10-8 Chuo,
Chuo-ku, Chiba 260-0013, Japan
<http://www.ccma-net.jp/>
[発行日]
2019 年 9 月 30 日
[印刷]
株式会社 エイチケイ グラフィックス

千葉市美術館ニュース「C'n」92 号

千葉市美術館 Chiba City Museum of Art

Topics

- 連載 館長のつれづれだより
- 特集1 ミュシャと日本、日本とオルリック
担当学芸員インタビュー
- 特集2 目 非常にはっきりとわからない
「目」ディレクター・南川憲二コメント
- 美術館の仕事を紹介します!
「その5 ワークショップの企画運営」
- 【イベント報告】 美術館の夏休み



Instagram
はじめました。



千葉市美術館公式 Instagram はじまりました！
展覧会やイベントの情報を、写真とともにお届けします。
みなさんのフォロー、お待ちしております！

@ccma_jp (https://instagram.com/ccma_jp/)



アルフォンス・ミュシャ《「ジョブ」ポスター》1898年 三浦コレクション、川崎市市民ミュージアム蔵



館長のつれづれだより ICOM 国際会議に参加して

第25回ICOM(国際博物館会議)京都大会が、去る9月1日から7日までの7日間、開催されました。3年に一度の世界大会が日本で初めて開催されたのです。ICOMは、博物館の進歩と発展を目的として、大戦後の1946年に設立され、現在は、世界140か国余の美術、歴史、科学、自然史(動物園・水族館が含まれます)など、広い範囲におよぶ、美術館・博物館の関係者、約40000人以上が加入しており、千葉市美術館も団体加盟をしています。

ここでは、博物館の運営、作品の保存修復、人類の犯罪など、分野別に30の国際委員が設けられており、それぞれが抱える問題の解決にむけて、独自の活動を展開しています。それらの委員

会が一堂に会し共通の課題を議論するのが世界大会です。今大会は「文化をつなぐミュージアムー伝統を未来へー」をテーマとして、地域の発展や多文化共生、災害時の対応などが討議されました。また、近年、美術館・博物館が、社会の問題に積極的に関与することが重視される傾向をみせており、この点を踏まえ、活発かつ熱い論議が交わされ、これまでである博物館の定義についての見直しも検討されました。今回の会議には、4500名もの出席者があり、盛会であったといえましょう。

わたしは、メイン会場で行われた「世界の中のアジア美術と博物館」というテーマを掲げた全体会議に登壇し、「日本美術の持つ特徴及び、その作品の展示

と取り扱いについての留意点」を内容とする報告を行いました。

今大会では、最近、世界で相次ぐ災害に対処するために、専門分野別に設けられている国際委員会の一つとして、災害時の対応を研究する委員会の新設が決まりましたが、わたしの参加した全体会合を出発点として、アジアの美術に係る諸々の問題を研究する国際委員会の新設も、今後、引き続き検討されることになりました。これは従来ともすると、ヨーロッパ重視であったICOMの活動に新しい風を、送り込むことになるでしょう。

最終日には、「ICOMとアジアの美術館・博物館との連携」、「持続可能な未来に向けた取り組みの強化」、「収集品の安全管理」を目指すなどといった内容を

折り込んだ「美術館がカルチュラル・ハブ(文化の結節点)」として、時代や国、学問分野を超えた交流の中心的役割を果たしてゆくことをうたう決議文を採択して大会は終わりました。

わたしにとってICOMの参加は、時代に即応する発展を目指す千葉市美術館の、今後の在り方を考えるうえで良い経験となったと思っています。この度のリニューアルを契機として、美術館は、千葉市にとっての「カルチュラル・ハブ」としての役割を果たすために、これからも努力を重ねる所存です。市民の皆様のご理解とご支援を、改めてここにお願い申し上げます。

〔館長 河合正朝〕

もっと知りたい!

ミュシャと日本 日本とオルリク

MUCHA AND JAPAN
JAPAN AND ORLIK
IN COMMEMORATION OF THE 100TH ANNIVERSARY OF
JAPAN-CZECH REPUBLIC RELATIONS

2019年

9月7日(土) →
10月20日(日)

担当学芸員インタビュー



【図1】アルフォンス・ミュシャ《「サラ・ベルナール」ポスター》1896年 サントリーポスターコレクション (大阪中之島美術館寄託)



【図2】《MIYOJO (『明星』第6号)》1900年 個人蔵



【図5】エミール・オルリク《東京の通り(日本便り)》1900-01年 宮城県美術館



【図6】織田一磨《道頓堀(大阪風景)》1917年 個人蔵



【図3】タヴィーク・フランチšek・シモン《富士》1928年
パトリック・シモン・コレクション、プラハ



【図4】ヴォイチェフ・プライシク《壁紙図案》
1900年頃 チェコ国立プラハ工芸美術館



【図7】ヴァルター・クレム《放牧場》1902年
ダッハウ市、ティーマンコレクション/ダッハウ絵画館



【図8】カール・ティーマン《秋の白樺》1907年 パトリック・シモン・コレクション、プラハ

——「ミュシャと日本、日本とオルリク」という展覧会は、どのような経緯でできあがったのでしょうか。

2014年に、プラハ国立美術館で「チェコにおけるジャポニズム展」という展覧会が開かれました。もともとは、この展覧会を再編成し、「チェコのジャポニズム」として日本で開催しようとしていたんです。しかし、実現にあたりいくつかの大きな壁があり、企画を仕切りなおさなければならなくなりました。それが2019年4月末、つい5ヶ月前のことです。共催館と話し合い、それまでの調査を活かしつつ、軸足を日本に移すことに決めました。そのうえで、アルフォンス・ミュシャとエミール・オルリクというチェコ出身の2人のアーティストを柱に、日本美術とチェコ美術の影響関係を紹介することにしました。もともと予定していた「チェコのジャポニズム」は、全5章構成のうちの第1章に落とし込んでいます。

——日本とチェコの芸術交流が感じられる、充実した展示になっています。

19世紀末から20世紀初頭にかけて、とくに版画の世界において、海外との距離がぐっと近くなるんです。丸善のような洋書をあつかう書店が出てきて、たとえばパリで出版された洋雑誌が、わずか数ヶ月後に日本で見られるようになる。海外へ行った人が、雑誌やポスターをトランクに入れて持って帰ってくることもありました。そういう環境ができあがったことで、1890年代に制作されたミュシャのポスターの図柄【図1】が、

1900年に出版された『明星』のなかでオマージュされる【図2】、なんてことが起こったんです。

——それまでと比べると、ずいぶん時差が少ないですね。

そうですね。そしてそれがまた、海外へと還っていく。オルリクが日本で木版画を学び、チェコで木版画を広めたように、影響関係が還流していったんです。はじめに予定していた「チェコのジャポニズム」は、チェコにおけるジャポニズムを紹介する内容でしたので、このような影響関係を提示できる内容になったことはよかったと思っています。

——世界各国でジャポニズムが起りましたが、チェコにおけるジャポニズムにはなにか特徴があるのでしょうか。

ほかの国と比べ、開花したのが1890年代と遅く、また1940年代まで長く続きます。タヴィーク・フランチšek・シモンという画家が、1928年に大きな富士山を描いていますが【図3】、このような「ザ・日本」のようなイメージは、当時の世界の流行からすると少々古めかしい気がします。チェコにおける芸術の近代化は遅く、象徴主義やアール・ヌーヴォー、表現主義などが一気に流れ込むのですが、そのひとつがジャポニズムでした。フランスでは、日本趣味の時代ののちにジャポニズムを昇華する時代がくるのですが、チェコではその両方が同時並行で広がっています。プライシ

クの壁紙【図4】のように、ジャポニズムとモダニズムが見事に融合している例もあります。

——序章では、ジャポニズムの要素を作り上げた浮世絵や版本が並んでいます。「北斎が観られるとは思っていなかった」という感想も見かけました。

「千葉でミュシャ展をやるらしい」という声をよく聞きますが、ミュシャの背景にあるジャポニズムについても知ってもらいたいと思っています。ミュシャ自身は影響を否定していますが、日本美術の影響を受けたパリのアーティストと造形感覚を共有していたことはあきらかです。序章では、千葉市美術館のコレクションも最大限に活用しているので、ぜひそこにも注目していただきたいです。

——ミュシャの影にオルリクが隠れてしまっている印象もありますが……。

エミール・オルリクについてはずっと興味を抱いていましたが、集客を考えると個展は難しい(笑)。でも、ミュシャと一緒にだったら紹介できるかも、と考えました。2人ともチェコ出身で、同じ白馬会展で作品が展示されていたり、同じ年の雑誌『明星』で紹介されていたり、共通点がありました。なので、展覧会としてストーリーが作れるな、と思ったんです。

——ミュシャが紹介されている8階の展示室と、オルリクが紹介されている7階の展示室では、が

らっと雰囲気が変わります。

7階の作品は比較的小さいんですね。でも、だからこそ物語っているものがあって。オルリクや当時の日本の版画家たちは、大きなタブローや彫刻だけが芸術ではなく、手のひらに乗るような作品にも芸術が宿ることを伝えようとしています。7階に入るとつぜん作品が小さくなり地味になりますが、それが真実なんです。

——最後に、見どころの作品を教えてください。

オルリクの石版画が好きですね【図5】。海外のアーティストが描く日本は、エキゾチシズムのフィルターがかかっていることが多く、美化されているように感じるんです。しかし、オルリクはフィルターを通さず描いている印象があって、しみじみと当時の日本を想像できます。それから、織田一磨は、オルリクの作品をもっとも昇華した版画家だといえます【図6】。筆致や淡い色使いがいいですね。このつながりも、展示のなかで見せたかったところですよ。めずらしいところでいえば、第4章の最後に登場する版画家たちは、日本でははじめての紹介になります【図7,8】。オルリクが伝えた木版画の技法を用い、オルリクを飛び越えた新しい造形が生まれているところがおもしろい。影響関係があるといっても、少しずつずれながら、進化した新しいものが出てきたりしているという、実りの大きさが感じられます。

【話し手 上席学芸員 西山純子】



目 非常にはっきりとわからない

Obviously, no one can make heads nor tails.

2019年11月2日(土)から12月28日(土)まで、千葉市美術館リニューアル前最後の企画展示として「目 非常にはっきりとわからない」を開催します。この展示会は、現実世界の不確かさを浮き彫りにする作品を展開し、国内外で大きく注目を集めている現代アートチーム「目」による、美術館における初の大規模個展です。

「目」は、アーティストの荒神明香、ディレクターの南川憲二、インストーラーの増井宏文を中心に、個々の特徴を活かしたチーム・クリエイションに取り組んでいます。その表現方法はさまざま。手法やジャンルにとら

われず、展示空間や観客をふくめた「状況」や「導線」を重視し、過去にはギャラリーを丸ごとホテルに仕立てあげたり、おじさんの顔を空に浮かべたりしています。

そんな「目」が、千葉市美術館でいったいどのような展示会を行うのか——ああ、言いたい! 言いたいけれど言えない! そう、「目」の作品は、事前に情報を入れずに体験していただきたいのです。とにかくみなさん、ご来場ください。最後に、ディレクターの南川さんよりいただいたコメントを紹介します。わたしたちから伝えられるのはこれだけです。

「目」ディレクター・南川憲二コメント

千葉市美術館で展示を行うにあたり、千葉県市原市の地磁気逆転地層を訪れました。そこには、77万年前に起こった地磁気の逆転をしめす地層がありました。わたしたちはいま、その地層の積み重ねのうえに立っています。地球のダイアリーともいえる地層から見ると、まるで何事も無いような日常の地表の上に立っているわたしたちは、とても不可解なものにも思えます。

タイトルの「非常にはっきりとわからない」は、アーティストの荒神の考えを言語化したものです。「本当は、一秒先すら何が起こるかかわからない世界を私たちは生きている。」「昨日まで太陽の公転軌道を回っていた地球が、明日はどうかは実は誰にもわからない。」荒神の言葉を逆に言えば、「どうなるかわからない」ということだけが、とてもはっきりと「わかっている」とも言えます。美術館の展

示では多くの場合、作品名や作家名、制作年、調査報告などを示して、「わからない」を解きほぐすことがあると思います。しかし、「非常にはっきりとわからない」展では、知識や情報を極力なくし、みなさんの主体性によって作品が現れるような展示会づくりに挑戦したいと思っています。具体的には、千葉市美術館の特徴的な建築をいかして、美術館空間全体をひとつのインスタレーション作品として展開し、作品の導線の中にみなさんを誘います。展示空間の中で目にする全てを疑い、信じ、考察する。そんな、みなさん自身の目を通して、わたしたちの現実の世界をもう一度捉えなおすような機会になればと思っています。もしかしたら、千葉市美術館へ行こうと思ったその瞬間、もう展示会は始まっているかもしれません。

ぜひ、みなさんのお越しをお待ちしています。



《たよりない現実、この世界の在りか》 制作:2014年 制作場所:東京／資生堂ギャラリー 撮影:加藤健



《おじさんの顔が空に浮かぶ日》 制作:2013年-2014年 制作場所:栃木県宇都宮市街地 主催:宇都宮美術館 館外プロジェクト

美術館の仕事を紹介します！

その
6

ワークショップの企画運営

千葉市美術館では、展示作品と関連する様々なワークショップを、年間を通して開催しています。ワークショップは2時間程度のものが多く、始まってしまえばあっという間に終わってしまうことがほとんどですが、実は見えないところで準備に手間暇がかかっています。そんなワークショップのできるまでを、「消しゴムはんこで蔵書印をつくろう」(9月8日開催。以降、蔵書印WS)を例に出しながら少しご紹介したいと思います。

まず最初にするのは、ワークショップのテーマ決めです。その時の展示会や出品作品の内容と関連付けながら考えていきます。例えば、蔵書印WSでいえば、「ミュシャと日本、日本とオ

ルリク」展の出品作家であるエミール・オルリクが、蔵書票を初めて日本に紹介したことで有名な人なので、そこに関係があるワークショップにしよう、そして消しゴムはんこなら身近な素材と技法で誰にでも楽しんでもらえるだろうと考え、テーマを決めました。

テーマが決まったら、次は講師を探します。人伝で誰か適する人がいないか紹介してもらったり、関連する書籍や情報サイトをスタッフで手分けして調べたり。時には中々見つからないこともあります。蔵書印WSにお招きしたあまのさくやさんは、美術館スタッフの友人の作家さんからご紹介いただくことができ、今回のテーマにぴったりの方でしたのですぐに連絡を取

りました。

テーマと講師が決まったらいよいよ具体的なプログラムづくりです。どの順番で説明したら参加者に伝わりやすいか、作業にはそれぞれ何分くらい時間は必要かなど、講師と一緒に当日の様子を思い浮かべながら細かい部分まで決めていきます。同時に、必要な道具や材料も確認し手配します。最近は通信販売で揃うことが多いのですが、準備には手作業が必要なこともあります。例えば蔵書印WSで使う木片は、そのままだと表面が荒れていたの、ボランティアさんと一緒にヤスリがけをして全体に優しい丸みをつけました。この他にも、当日は全体が安全かつスムーズに進むようにサポートに入



▲サポートスタッフとの打ち合わせの様子



▲すてきな蔵書印ができあがりました!

ってもらうスタッフを募集したり、そのスタッフ達と事前の打ち合わせを重ねたりしながら、当日に臨みます。

このように、一つのワークショップを開催するまでに、半年以上かけて準備をしていきます。それでも当日は、予想外のことが起きることもしばしばですが、それもまたワークショップの醍醐味。今後も子どもから大人まで楽しく表現できる場をたくさん作っていきたいと思っていますので、こんなワークショップ面白そう! などアイデアが浮かんだ時は、ぜひ美術館までお知らせくださいね。

〔学芸員 田口由佳〕

美術館の夏休み

豊福亮「パラチバ」 7月13日(土)～8月25日(日)

前号で経過報告をした「パラチバ」ですが、さらなる進化を遂げ、先月最終日を迎えました。全4回のワークショップと、毎日の設計図の制作で、すてきな街ができてきました。リニューアル後も、このような企画を開催する予定なので、ぜひ楽しみにしてください！



おしえて!「はてな先生」

7月29日(月)～8月10日(土)

「はてな先生」とは、鑑賞の相談に乗ってくれる頼もしいボランティアさんたちのこと。今年もみなさんの「はてな」をいっしょに解きほぐしました。アンケートコーナーや金継ぎに触れるブースもあり、展覧会をより楽しめる内容となっていました。



中学生のためのギャラリークルーズ 7月25日(木)・26日(金)

夏休み恒例の中学生向け鑑賞プログラム。鑑賞リーダーの案内のもと、作品を観てまわることができます。今年は美術部さんが団体で来てくれたり、宿題を片手にお友達と一緒に来る子がいたり、いつも増してにぎわっていました。



ワークショップ

「魯山人になろう～金継ぎでアクセサリーづくり～」

8月4日(日)

柳澤綾佳さんを講師にお招きし、金継ぎブローチを作りました。陶片を選ぶところからみなさん大興奮。複数の陶片をパテで接着し、やすりをかけ、新うるしを塗って完成。おひろめ会では、すてきな作品がずらっと並びました。想像を超える応募があったので、ぜひまた開催したいと考えています！



美術館で縁日気分!! 8月18日(日)

美術館の夏の風物詩となりつつある縁日気分は、今年也大賑わい! 毎年大人気の飴細工や、木版画体験、お面作りワークショップ、似顔絵ブースなどなど、たくさんの出展者さんのおかげで、美術館ならではの楽しいイベントになりました。

